保護者の時代とこんなに違う

今どきの大学・専門学校の学び

お子さんが今後進路選択を進めるうえで、保護者自身も最近の大学・専門学校での学びのあり方を理解しておくのは大切なこと。何しろ、今どきの大学・専門学校での学びは、ひと昔前とは大違い。一方的に講義を受けるばかりではなく、自発的に調べ、グループで討論し、考え、行動する。そんな学びの変化を、実際に体験している学生の皆さんから知ってみようという企画です。将来のお子さんの姿と重ねてみませんか？

構成・取材・文／清水由佳

地域おこしを実践で学ぶ

立命館大学 | 産業社会学部 3年 | 奥田彩亜さん

農村地区の課題解決に少しでも力になりたい。やりたいことだらけです！

カフェの案内看板を手に。周囲の友達から「いつもキラキラしている！」と言われるとおり、何ごとにも好奇心いっぱい。「外に行けば行くほど、いろんな人とつながって、そこからまた新しいことが見えてきます。もうやりたいことがいっぱいありすぎて（笑）」

京都の京北地区と都心部を食と農でつなげる活動

立命館大学の産業社会学部では、「社会の現場で学ぶ」をテーマに、地域連携プロジェクトが数多く実施されている。その一つが、「リッツファーム・プロジェクト」。奥田さんは、このプロジェクトのリーダーだ。

主な活動は、京都市の京北地区の市民農園で野菜を育て、その野菜を販売し、料理してカフェなどで提供すること。そしてそれらの活動を通じて、都市部の人々と「京北」をつなぎ、地域の活性化につなげようという取り組みだ。

「大学2年まではラクロス部で部活中心の大学生活。ケガで退部を考えたときが、ちょうどゼミの選択時期で、フィールドワーク中心で視野が広がるかなと思い選びました」

その言葉どおり、3年生から奥田さんの世界は急激に広がっている。「京北地区の農家の方々との交流のほか、『京北ふるさと祭り』などのイベント会場でもいろんな職業の人と交流します。先日も、木こりの方と知り合い、一緒におもしろいことができるといいねと話が盛り上がっているところです。また、同じように地

今どきの学びを理解するためのキーワード

社会人基礎力
2006年から経済産業省が提唱している「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」。「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力と、それらをさらに詳しく「主体性」「課題発見力」「発信力」など12の能力要素を提唱している。現在、大学をはじめとした教育現場で行われているさまざまな改革の基盤にある考え方の一つ。

アクティブ・ラーニング
一方的な講義だけでなく、学生が主体的に授業に参加し、仲間と深く考えながら課題を解決していく授業形態。グループワークやディスカッションなどを取り入れて行うことが多い。

協働学習
学生同士が互いに協力し合いながら、課題などを解決していく学習方法。アクティブ・ラーニングで行われている学習形態の一つでもある。

PBL（Project Based Learning）課題発見&解決型学習
「プロジェクト型学習」や「問題解決型授業」と言われることもある、何らかの課題をグループで解決していく学び。企業や自治体などから実際の課題を提示されて行う場合も多い。

※学生の皆さんの学年は、2016年1月現在のものです。

市民農園では、自分たちで作付け計画から収穫まで、すべて行っている。学校もあって毎日は来られないので、手間がかからず強い野菜を中心に育てている。この冬は聖護院大根と白菜がずらり。

サツマイモが大豊作。京北ふるさと祭りで知り合ったパン屋さんが「さつまいもクロワッサン」として商品化してくれたのがうれしかった。

1日店長ができる京都市内のカフェを紹介され、2015年は3回、「京北やさいカフェ」をオープン。自分たちが育てた野菜を中心に、メニュー決めから調理、サービスまですべて行った。「お客様を呼ぶことの大変さも実感しました」

大学の構内でも、自分たちが作った野菜を販売。

域活動を行っている他大学の学生とも大勢知り合いになって、その縁でカフェでの料理の提供も始めたし。やりたいことがどんどんわいてくる！毎日がめっちゃ楽しいです！」

活動資金の確保のため自分たちで助成金も申請

とはいえ、農作業が初めてのメンバーも多く、活動に向けてのモチベーションはさまざま。

「最初は楽しくても、継続して農作業というとやっぱり大変。どうやったらみんなが同じ気持ちで取り組んでいけるか。リーダーとしての壁にも、いきなり直面しました」

そんななかで、こまめに声をかけ、自発的に取り組めるような役割分担をしっかり行うことの大切さも実感。さらに、活動資金を確保するため、市の助成金の申請も自分たちで行った。

「資料を作って、プレゼンをして。もうドキドキでした。でも、その会場で、いろいろな市民活動をしている団体の方たちと知り合えて、それがまたおもしろかった。そういう人のつながりに、ワクワクします」

人とのつながりで物事が動くおもしろさを実感し、社会に出たらもっと大きなことも実現できるのではと、社会人になることが楽しみという奥田さん。そんな奥田さんの将来の夢は、海外で農村の力になること。

「今日本の農村地区で起こっている問題は、将来東南アジア諸国にもきっと訪れると思うんです。国際的に地域活性化に貢献できるような人になりたい。まずは、インドの農村にぜひ行きたいと思っています」

どんな高校生活？

プール学院高校（大阪・私立）卒業

高校時代は、バレーボール部に所属し、部活一色の高校生活。環境に関する社会問題に関心があり、現在の学部を選択。実は、家庭菜園をしていたおじいさんの影響で、自分も野菜を育ててみたいと、家の屋上で家庭菜園に挑戦していた。「そういう意味では、食べることや、育てることに、もともと興味があったんですね」。

リッツファーム・プロジェクトとは

2007年度から、産業社会学部の教員と学生、NPO法人が京北地区の活性化に取り組む「京北プロジェクト」を実施。そのスピンオフ活動として、2012年から髙嶋正晴教授のゼミを母体に「リッツファーム・プロジェクト」が行われている。メンバーは、髙嶋ゼミのゼミ生と、京北プロジェクトに協力する学生たち。2015年度はゼミ生16人を中心に活動。

ビジネスコンテスト挑戦から学ぶ

群馬県立女子大学 | 国際コミュニケーション学部 3年 | 齋藤なつ希さん

うまくいかない悔し涙をたくさん流した。その分、着実に成長したと思えます

ビジネスプランのプレゼンテーションの映像を前に。「人前で話す機会が多いので、自分の意見をしっかり考え伝えることに慣れてきたと思います。将来は、メディアを通じて、社会に貢献できる仕事をしたいと思うようになりました」

どんな高校生活？

渋川女子高校（群馬・県立）卒業

ダンス部に所属し、ダンス三昧の高校生活。ヒップホップ、創作ダンス、八木節など、幅広いジャンルに挑戦。高校1年次に、英語スピーチコンテストで優勝し、アメリカに1週間語学研修へ。もっと英語を勉強し、視野を広げたいと思って、現在の学部に進学を決めた。

社会デザイン論ゼミナールとは？

国際コミュニケーション学部の安齋徹先生のゼミナール。社会をよりよく変革し、新たなビジネスを創造していくことが目標。「日本一のゼミを目指そう!」が合言葉で、社会貢献、地域の課題への取り組み、学外コンテストという3本柱に積極的に挑戦する。プロジェクトのリーダーは輪番で必ず回ってくるので、責任をもってやり遂げる経験を全員がする。

いくつものプロジェクトを並行して頑張ることの意義

齋藤さん所属の社会デザイン論ゼミでは、いくつものプロジェクトを同時並行に進める。「東北復興応援チャリティ・リレーマラソン支援」「大学生観光まちづくりコンテスト」「群馬県立図書館の更なる活性化策の提言」「道の駅『玉村宿』女子大プロジェクト」「前橋企業魅力発掘プロジェクト」など。ゼミ生は7人。足並みをそろえるだけでも並大抵ではない。

「夏休みも、毎日学校にいました（笑）。とにかく、必ずみんなで集まって、議論したり状況確認したり。先生は、『仕事は必ず複数あって同時並行。マルチタスクを確実に行うことが重要なんだ』と。おかげで自分が確実に成長しているのがわかります」

議論をし、人前で発表するチームの力を実感

このゼミを取るキッカケは、2年次に履修した安齋先生の「ビジネス・リーダー論」。毎回席替えしての頻繁なディスカッションや地域の課題に取り組むグループワークが、新鮮でワクワクした。一人では思いつかないことでも、チームで頑張ると思いもよらない力が発揮できる。それは3年生になってさらに痛感している。

「メンバー全員が納得いくまでとことん話し合い、ときには悩みも共有し合う。かけがえのない仲間と一緒にいると何でもできる気がする」

結果として、「大学生観光まちづくりコンテスト」では、ポスターセッション優秀賞になり大よろこび。一方で、JAXAの技術を活用したビジネスプランを考える「前橋企業魅力発掘プロジェクト」では惜しくも全国

高齢者の認知症予防に体操アプリを開発

医学部生だけど、子どものころから「ものづくり」も大好き。選択必修の授業「リベラルスタディ」に、「人型ロボットプログラミング入門」のコースがあると知り、迷わず選択した。ちょうど鹿児島県の肝付町が募集していたICTを活用した地域おこしアイデアへの参加も決定。

「病院実習で、車椅子の高齢者の認知症予防には運動が大事と聞き、pepperに体操アプリを入れたら役立つのではと開発に取り組みました」

大阪府立大学の学生とも共同開発したり、pepperのコミュニティサイトなどを通じてさまざまな社会人や技術者の人々とアイデアや情報交換するなど、人の輪が広がった。10月下旬には、実際に肝付町の老人福祉施設でお披露目も行った。

現場の人の意見を聞きますます開発意欲が高まる

「ところが、当日うまく動かなくて…。でも、高齢者の方々が、とても楽しそうにpepperをなでたり、話しかけたり。施設の方から、『あんな笑顔はなかなか見られない』というお話をうかがい、もっといいものを開発したいと思いました」

獨協医科大学 | 医学部 1年 | 川上博紀さん

医療に役立つロボットプログラムを学ぶ

一人で頑張るのではなくみんなで頑張るのが、大学の学びだと思う

同じ授業の仲間たちと、グループワークでアプリ開発。教え合い、助け合いながら。

将来の目標は、循環器系の医者になることという川上さん

アプリを開発したpepperたちと。これからは、手にしているSotaを活用した開発もしたいと思っている。「医学の道を進んだら、ものづくりはあきらめるしかないと思っていたのが、こんなふうに自分の好きなことがつながるなんて。勉強は大変だけど、とてもやりがいがあります」

人と濃密に関わることで学ぶ

日本電子専門学校 | 情報ビジネスライセンス科 2年 | 野中麻菜美さん

人と関わる難しさを痛感。経験を積み重ねやっぱり人と関わることが好きと確信しました

「高校時代は、これといって夢もなく、何をしたいということもなかったけれど、嫌でも人と関わったことで、逆に人にすごく関心をもてるようになりました。人材派遣会社の正社員に内定し、4月からの社会人生活が今からとても楽しみです」

ディスカッションでは、ちゃんと自分の意見を言うことも大事だと実感。「視野が広くなったと思います」

2年めに、クラスで参加した文化祭。フランクフルトの屋台を実施。「売上予測や原価計算など、ビジネスを意識してしっかりやりきりました！」

グループワークで実感。人の考えはこんなに違う！

「高校時代、将来の具体的な夢はなく、漠然と『とりあえず大学に進学かな…』と思っていました」

高校の進路指導室で日本電子専門学校の資料を目にした野中さん。「ビジネススキル」と「社会人基礎力」を並行して学べる学科の存在を知り、将来の選択肢が広がると感じて入学を決意。入学後は、日本マイクロソフトなど企業人の特別講義や、ビジネスの立案・運営方法について、架空企業を用いた多種多様な設定のグループワークを頻繁に体験。

「はじめは、たった4人のグループでも意見が飛び交い、見解に多くの差異があることに驚きました」

高校時代と違い、苦手な人とも必ず関わらなくてはいけない。授業では数えきれない問題が発生。結果、1年次に実施する学園祭の企画はお蔵入りとなり、コミュニケーションの難しさを痛感したそうだ。

「気まずくなってもグループワークは続く。その繰り返しです。積み重ねた経験によって、徐々に人との距離の取り方や、議論の進め方を感覚で理解できるようになりました。まさに体得したと言えます」

自分からボランティアに参加。行動や視野が広がった

いかに自分と違う人の視点に立てるかが楽しくなってきたという野中さん。次第に「人と関わる仕事をしていきたい」と思うように。興味のなかった地元のマラソン大会のボランティアに参加したり、人と関わる機会を積極的に増やすようになる。

「2年目の学園祭は、切磋琢磨し成長したクラス全員でリベンジ！苦難の末やり遂げた達成感は格別で、心に残る思い出ができました」

プロジェクトを進めるうえでは、本音でのぶつかり合いを避けることができない。「その分、深い絆で結ばれたと思います」

大学ではフラダンス・サークルにも所属し、こちらも全力投球。カレッジ・フラ・コンペティションで準優勝も！

大会に進めず、悔し涙を流した。

「でも、アイデアとプレゼンテーションは絶対良かったと思うので、次の機会にはさらに磨きをかけたい」

そんな、失敗から立ち上がる逞しさも、大学で身につけたようだ。

プログラミングを通じて、人と学び合い、協働することを体験している川上さん。一方で、大学では部活が必修でバドミントン部に。先輩から、授業や学生生活について教わることも多い。

「高校までは、勉強は個人でひたすら力を伸ばす感じだったけど、大学の学びは、みんなで協力して成長していく。そんな違いがあると実感しています」

どんな高校生活だった？

川口総合高校（埼玉・市立）卒業

弓道部に所属して部長を務めた。40人近い部員がいたため、どうやってとりまとめていったらいいのか、非常に悩んだ。叱っても、そこで自分が伝えたいことがちゃんと伝わっているのかなど心配だった。今の自分だったら、もっと上手に指導ができたのではないかと思うことも。

どんな高校生活？

江戸川学園取手高校（茨城・私立）卒業

中学生のころ、父親の心筋梗塞がきっかけで、医者を目指したいと思うように。そのため、高校も医科コースを選択。高校1年次から朝から夜遅くまで勉強漬けの毎日。「おかげで自分を律する精神はついたと思います」

情報ビジネスライセンス科とは？

あらゆる業界で活躍するための基礎的なパソコンスキルやビジネスマナーのほか、コミュニケーション力やマネジメント力などを中心とした「社会人基礎力」をアクティブ・ラーニングでしっかり身につけることを目指す。野中さんも、「入学後頻繁に『コミュニケーション力』『社会人基礎力』という言葉を聞き、意識するようになった」という。

人型ロボットプログラミング入門とは？

基本医学情報教育部門の坂田信裕先生が指導する人型ロボットのアプリ開発を通して、医療などの課題解決を考える授業。坂田先生は、新入生の必修科目である「医学情報リテラシー」や「スタディスキルズ」を担当し、グループワークなどを通じて、高校までとは違う大学での能動的な学びの姿勢を身につける授業を実施。この授業コースは、その進化形とも言える。

学部全体で企業課題を競い学ぶ

同じ課題で同じプロセスを踏むのに大きな差が出る。挫折の連続が成長のバネになります

立教大学 経営学部 2年

安藤沙紀さん　木ノ下達也さん

石井有彩さん　三谷真之さん

ビジネス・リーダーシップ・プログラムの授業風景。お互いの意見を、いかに出し合うか。妥協せずに最後まで粘ることも大事だと実感するという。

左から、安藤沙紀さん、木ノ下達也さん、石井有彩さん、三谷真之さん。皆、一様に口をそろえて、「この1年で大きく成長した。自分が変わった」と実感している。それは、真剣に課題に向き合い、学生同士で徹底的に話し合いをしてきたからこそ実感できる成長だ。

入学と同時にグループワークの洗礼

立教大学の経営学部では、学部生全員必修の「ビジネス・リーダーシップ・プログラム（BLP）」が行われる。まずは、入学と同時の4月。1泊2日の「ウェルカム・キャンプ」で、初めて顔を合わせる学生同士がグループになり、企業からの課題（例えば、タブレットPCの新しい使い方など）を話し合い、プレゼンで競う。

「学生主体の授業は初めてで、大学の授業は、自分で作り出すんだと思いました。一人が欠けただけでも成り立たないし、果たす責任の大きさを感じました。同時に、勝ち抜いたグループは学部生400人の前でしっかりプレゼンをしている。自分の未熟さも知って、でも自分もああなれるかもという成長への期待もありました」（安藤さん）

そんなグループワークの洗礼後、前期の半年間で、企業から出された新たな課題に取り組む。18クラスから選抜を勝ち抜いたグループが、最終プレゼンを行い最優秀が決定する。

「正直、最終プレゼンも大したことないんじゃないかと思っていました。ところが、同じ学年で、同じプロセスを踏んできたのに、何でこんなに差が出るんだ!?ってすごいショック。アイデアだけじゃなく、人に伝える力、ひきつけるプレゼンテーション力が、自分たちとはまったく違っていたのに驚きました」（木ノ下さん）

この次こそは、そんなライバル心にも火がつく。さらにBLPの重要なところは、「振り返り」をしっかり行うこと。最終プレゼン終了後、2コマかけて、個人とグループでプロセスをていねいに振り返る。

「特に、メンバーからフィードバックを受けたのが、自分にとって新しい気づきになりました。自分では、否定的なことを発言するとグループワークの妨げになる気がして控えていたのですが、メンバーからはそれよりももっと批判的な視点ももって話に加わってほしいと指摘され、反省しました」（安藤さん）

「グループワークは、とにかく失敗の連続でした。いいと思ったアイデアも、他が同じようなことを考えていてショック。自分の考えていたとおりに進むことがなくて挫折祭（笑）。人と自分の考えていることの違い、難しさを痛感した半年でした。その後の半年では、その反省を踏まえて自分のやり方に固執せず、変えることにも挑戦しました」（三谷さん）

ステューデント・アシスタントでさらに自分の成長を実感

授業では、必ず1学年上のステューデント・アシスタント（SA）が1クラスに1人つき、先生と学生の間を取りもち、さまざまな相談に乗る。4人とも、現在はそんなSAだ。

「授業の中では、私たちも解説する場面が結構あって、そこでの説明のしかたや解説資料など、もっとこうしてみたいと提案するとやらせてもらえる。先生と一緒に授業を作っていると感じられます」（石井さん）

実際に、4月頭のウェルカム・キャンプはSAがすべて準備をし、当日の運営などもSA主体で行われる。

撮影／平野 愛

新しい学びが、なぜ必要なのか

京都大学
高等教育研究開発推進センター教授
大学院教育学研究科兼任
溝上慎一先生

社会で力強く生きる学生を育てるには、教育は変わらざるをえないのです

今、世の中は大きく変化しています。グローバル化や情報化、ビジネスの高度化・専門化など、多くの社会的要因の変化に伴い、従来の教育の考え方が成り立たなくなってきています。新卒者の無業やニートなどが社会問題化するにつれ、学校から仕事への移行における構造的な問題も指摘されるようになりました。まさに、「学校から仕事・社会へのトランジション（移行）」が大きな課題となっています。

そこでの重要なポイントは、3つ。「主体的な学習態度」と、「対人関係やコミュニケーション」、「将来の見通しというキャリア意識」です。社会で働く人にとってみれば、当然と思える姿勢ばかりでしょう。言われたことしかしない、では社会では通用しませんし、他者との協働作業は不可欠です。将来の見通しを立て、未来と現在をつなぐ力をつけると、驚くほど意欲的に行動し、さまざまなことを貪欲に学び、強くなっていく学生を目の当たりにします。そこで、社会とつながるプロジェクト学習やアクティブ・ラーニングなどによって、力をつける意味があるのです。

「話はできない。声も小さい。でも、もくもくと問題を解いたりする子どもも尊重すべき」という声も聞かれます。しかし、多様な価値観の尊重と、その子どもが将来どうなるかということは別です。

大学では、そのような学生が社会で厳しい状況に置かれる確率がかなり高いことを知っています。残念ながら、社会で求める力というのは確実にあるのです。「個性」として見過ごすのではなく、社会といかにつなげ、大学で主体的に学び、力強い大人として社会で働き、生活を営めるようにする。そういう教育が重要なのです。

SAとして、後輩学生たちのサポートをいかにしていくか。仲間同士の連携や打ち合わせも念入りに。1年の成長を大きく実感できる瞬間でもある。

どんな高校時代でしたか？

安藤さん●香蘭女学校（東京・私立）卒業
人前で話すのが嫌いで、自分から積極的に何かをすることがなかった。テニス部には所属していたが、楽しければいいというタイプで、リーダーシップなんて考えたこともなかった。今、自分がこんなことをしているなんて、自分でもびっくり。

木ノ下さん●立教池袋高校（東京・私立）卒業
ごりごりの体育会系野球部で、ひたすら野球。部活以外はほとんど何もしていなかった。言われたことをひたすらやって、でもなかなか成果も出せず、耐え忍んで頑張っていた。

石井さん●湘南白百合学園高校（神奈川・私立）卒業
放送部には所属していたけれど、あまり活発に活動していなかったし、自分もあまり力を入れず。一度だけ、「変えてやる!」って言い出したことがあったけど、それも何もできずに失敗。口では「将来、大きなことをするんだ」など言っていたが、何も行動が伴わず、ぼんやり過ごしていた。

三谷さん●成田国際高校（千葉・県立）卒業
中学では生徒会長、高校でもバレーボール部部長など、何かしらリーダーシップをとる役割だった。良い成績をとることが第一で、何が正解なのか、どういう行動をすればいいか、人の顔色から判断するようなところがあった。でも、大学では正解のないことばかり。今とは全然違っていた。

ビジネス・リーダーシップ・プログラムとは？

経営学部の1年生は全員必修、2年生の前期は、経営学科は必修、国際経営学科は選択で履修する共通プログラム。企業の協力を得て、企業から出される課題に対し、半年かけて調査・研究・話し合いを繰り返し、プレゼンテーションを行う。どのような提案を行うかももちろんだが、その過程で、チームの中でいかに自分の力を発揮していくか、チーム力を生かすか、経験を通じて体験する。「カリスマではないリーダーシップ」を目指す。

「数カ月かけて準備を進めるので、ものすごい達成感です。実際の授業が始まると、もう終わったような気になるほど（笑）」（三谷さん）

そんななかで、授業を受ける側から教える側の視点がわかるように。「どんなことにも、何かしらの意図があったんだと気づきました。おかげで他の授業でも、何でこれをするのかと、よく考えるようになりました」（安藤さん）

そういう気づきが日頃の学びを深め、広い好奇心につながっている。「まずは海外留学。申請をちょうどしたところ。いろんなことに挑戦したいと思います」（木ノ下さん）